第Ⅱ章

全国防災まちづくりフォーラム

目　次

１．「第１回全国防災まちづくりフォーラム」の概要――――――――――――――１
（１）実施要領――――――――――――――――――――――――――――１
①「全国防災まちづくりフォーラム」の開催趣旨――――――――――――１
②実施要領――――――――――――――――――――――――――――１
（２）実施内容――――――――――――――――――――――――――――２
①全国防災まちづくりフォーラム活動発表会――――――――――――――２
②全国防災まちづくりフォーラム審査講評会――――――――――――――２７
（３）関連プログラム――――――――――――――――――――――――――２９
①ＮＰＯ日本公開庭園機構のリレーシンポジウム――――――――――――２９
②(社)日本損害保険協会プレゼンテーション
『“ぼうさい探検隊”マップコンクールの紹介」――――――――――――３０

２．企画･準備――――――――――――――――――――――――――――３１
（１）企画･準備の経緯――――――――――――――――――――――――３１
（２）プレイベント「地域住民の手で行う防災まちづくりを考える会」――３２

３．仙台を中心とする地域の防災まちづくり活動の現状――――――――――３３

４．開催の成果と今後の検討課題――――――――――――――――――――３４
（１）開催の成果――――――――――――――――――――――――――３４
（２）今後に向けた課題――――――――――――――――――――――――３４

≪参考≫「防災フェア 2005」の概要――――――――――――――――――――３７

１.「第１回全国防災まちづくりフォーラム」の概要

（１）実施要領

①「全国防災まちづくりフォーラム」の開催趣旨

近年、個人や地域の諸団体、ＮＰＯ等の防災まちづくりの活動が広がりを見せてきている。その中には、防災を主目的として始まったものでない地域の活動が、何かのきっかけで防災の関心を高めた例も少なくない。一方、大災害から時間が経つと防災意識が低下しがちとなり、市民の手のよる防災活動は継続面で苦労が多い。このような状況を踏まえ、平成 16 年 10 月に「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」がとりまとめた「民間と市場の力を活かした防災戦略の基本的提言」では、防災まちづくりの動きを支援するため、先進事例等の情報提供や地域内・地域間の支援などへの取り組みを提言している。

これを受け、内閣府では全国の防災まちづくりに関わる推進者が集う場として「全国防災まちづくりフォーラム」を開催し、各地域における防災まちづくりの状況を報告し合い、知識・ノウハウを交換し、相互に励ましあう機会を提供することとした。これにより防災まちづくりに関連した地域内及び地域間の交流を支援し、防災まちづくり活動を活性化させ、関係する市民・団体に永続的な活力を養っていただくことをめざすものである。

本年は 9 月 2 日～5 日に仙台市で行なわれる「防災フェア 2005」（参考参照）にあわせ、「第 1 回全国防災まちづくりフォーラム」と題し、防災まちづくり関係者が自らのすすめる防災まちづくり活動を相互に発表しあうイベントを、講演会や展示とともに開催した。

②実施要領

■日　程

平成 17 年 9 月 4 日（日）　10:00～18:00

■場　所

ＡＥＲ（アエル）５階　仙台市情報・産業プラザ　ネ！ットＵ多目的ホール（仙台駅直近）

■実施主体

主催：内閣府、仙台市、(社)日本損害保険協会、防災週間推進協議会

後援：仙台商工会議所、仙台防火委員会

■プログラム

【午前】（参加者数　約 50 名）

・ＮＰＯ法人日本公開庭園機構のリレーシンポジウム

【午後】（参加者数　約 120 名）

・全国防災まちづくりフォーラム活動発表会

（２２団体：仙台市及び宮城県内団体９、県外団体１３）
・(社)日本損害保険協会“ぼうさい探検隊”マップコンクールの紹介
・全国防災まちづくりフォーラム審査講評会
・懇親会（参加者等の交流会）（17:40～18:00）

■展示（防災まちづくりフォーラム関連展示）

・防災まちづくりフォーラム参加団体(一部)の展示

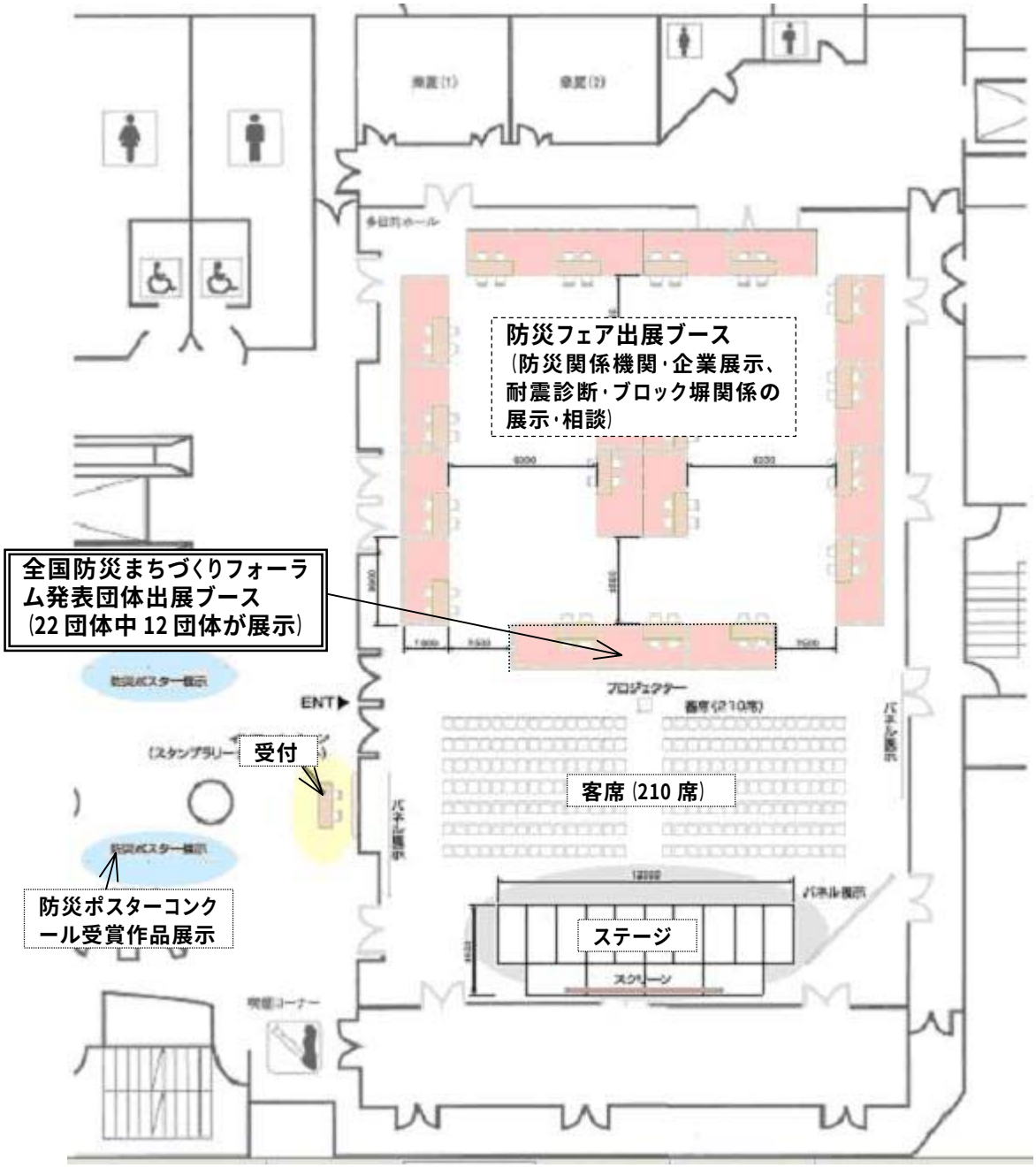


図　ＡＥＲ５階会場のレイアウト

（２）実施内容

①全国防災まちづくりフォーラム活動発表会（13:00～15:50※時間は実施時間／以下同様）

１）主催者挨拶

・内閣府大臣官房審議官　　武田文男氏
・仙台市副市長　　櫻井正孝氏
・(社)日本損害保険協会常務理事　　吉田浩二氏

２）活動発表

■発表の順番、方法

類似の活動を行なっている仙台市及び宮城県内の活動グループと県外の活動グループが交代で発表する。１グループ５分間。発表の形、方法は自由。

■発表者　　（＊番号は発表順）

		活動地域（県内○）	グループの属性			
			自主防災組織	ＮＰＯ	任意団体	その他
1	大岩２丁目自主防災会		○			
2	木ノ下町内会	○	○			
3	目白まちづくり倶楽部				○	
4	上町東町町内会	○	○			
5	ひらつか防災まちづくりの会			○		
6	霊屋下町内会	○	○			
7	早稲田商店会					○
8	ひとりでも安全・安心まちづくり実行委員会				○	
9	まちづくり政策フォーラム	○		○		
10	ＮＰＯ豊前の国建設倶楽部			○		
11	福住町町内会	○	○			
12	ＮＰＯながおか生活情報交流ネット			○		
13	鈎取ニュータウン町内会	○	○			
14	東京駅周辺防災隣組（※審査対象外）				○	
15	泉中央地区防災協議会	○			○	
16	ＮＰＯ江東区の水辺に親しむ会			○		
17	（社）宮城県建築士会	○				○
18	安心安全情報連絡協議会				○	
19	国分町交番支援システム分町Ａ-Ｎｅｔ運営委員会	○			○	
20	ＮＰＯ日本公開庭園機構			○		
21	ＮＰＯ都市防災研究会			○		
22	国分寺防災まちづくり学校					○

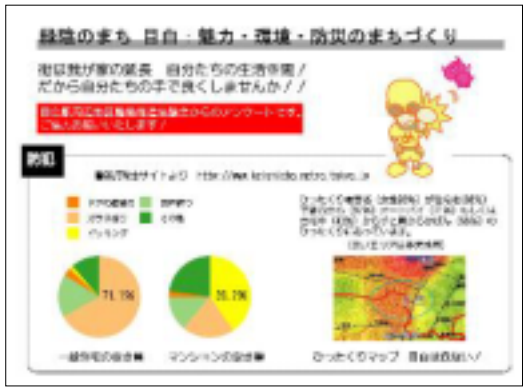
発表１

グループ名称	**大岩2丁目自主防災会**			
グループの属性	自主防災組織		活動地域	静岡県静岡市
テーマ	東海地震必至といわれる静岡市における町会の防災活動			
発表者	大岩2丁目町内会顧問　鈴木昭二氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	･昭和56年に自主防災組織をつくり、以来活動を続けてきたが、阪神･淡路大震災以降、活動を大幅に見直した。 ･ひとつは「自主防災台帳」づくりで、災害時に役立つ資格や技能を持つ人、及び独居老人や障害者など災害時要援護者について、各自の承諾を得てﾘｽﾄアップ、台帳を作成した。 ･これによって、町内にはアマチュア無線免許取得者19名、看護士18名、医師9名などさまざまな資格や技能を持つ人がたくさんいることが分かった。そうした人たちもアマチュア無線の会を作るなど自発的な活動を始めるようになった。「防災組織」も、看護士は救護班、医師は医療班、アマチュア無線グループは情報班というように町内の有資格者、技能者を活用できるよう見直しをした。 ･また、台帳作成によって災害時要援護者の所在や寝所の位置が分ったので、隣組で相談し、誰が誰を救出するのか役割分担を決めておくことにした。 ･さらに「防災訓練」も見直した。以前は小学校などに集まる「集合訓練」であったが、ひとりでも多くが体験できるよう、町内の班（9班）ごとに防災組織をつくり、訓練もそれぞれ9箇所で実施するようにした。こうすることで、参加者は900人から1200人に増えた。 ･若い世代を参加させる工夫としては、若い世代はマンションや社宅にいるので、マンションの駐車場を使えるよう交渉して実施したところ、マンション内の子供や親たちのほとんどが参加し、大成功だった。 ･防災訓練に参加することにより、子供や親の意識も向上するので、「見学訓練」から「体験訓練」の形にするよう、行政にも話している。また、町内会だけの訓練でなく、市役所･消防署分団･企業等と共同で実施するようになっており、訓練内容も決まりきった訓練を繰り返すのでなく、一人でも多くの人が楽しく参加できるよう常に工夫をしている。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	有

発表２

グループ名称	**木ノ下町内会**		
グループの属性	自主防災組織	活動地域	仙台市若林区
テーマ	地域ぐるみで取り組んでいる夜間防災訓練の概要と安否確認について		
発表者	木ノ下町内会長　高橋みさを氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	・木ノ下町内会は1,000世帯の大きな町会で、長い間地域ぐるみで防災活動に取り組んでいる。今は「災害は忘れた頃にやってくる」という呑気な例えの状況ではなく、「災害は来るときには来る」という状態にある。町の回覧板には必ず「災害は来るときには来る」と書いておいて、私たちは常に災害に備えている。 ・常時携帯品について：会場で今、ホイッスル、ラジオ、ライトを持っている人はいるか？（誰もいない）　私たちはこの3つはいつも持って歩けと呼びかけている。私は阪神・淡路大震災や雲仙普賢岳などいろいろな被災地に行って教訓を学んでいるが、地震の時はデパートなどは真っ暗になる。ホイッスルは阪神・淡路大震災の教訓から、どこででも自分の居場所を分ってもらえるよう、市販のものに名前・電話・住所・血液型を記載したシールを貼るものにして、全世帯に配布している。 ・「安否確認」について：町では全世帯を16に分け、いざと言うときに消防団ＯＢや婦人防火クラブリーダーなどが中心となって、班毎に救助に当たることにしているが、家に被災者がいるかどうかすぐ分かるよう、全戸にこの札（表：木ノ下町内会、裏：赤字で「防」）を配布している。これは表側を出して常に家の前に下げておき、災害時に家族全員が家を離れる場合には裏（「防」）に返すことにしている。札が裏返っていない家は「人がまだいる」という目印になる。ただ、災害時には全国からレスキュー隊が来るから何の目印か分らないのでは、と言われたので、市の消防隊にだけでも分ってもらえるよう、市消防局にこの札をお渡ししておく。 ・「夜間防災訓練」について：通常の防災訓練では参加者がいつも同じなので、15年前から「夜間防災訓練」を始めた。この工夫で勤め人や高校生も訓練に参加するようになった。 		
資料	配布資料　なし	ブース展示	なし

発表３

グループ名称	**目白まちづくり倶楽部**			
グループの属性	任意団体		活動地域	東京都豊島区
テーマ	住宅地のまちづくり活動が実を結んだ防災上の成果			
発表者	柴田いづみ氏			
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有	
発表内容	・「目白まちづくり倶楽部」は建築家、都市計画家、商店主、主婦などがコミュニティ活動を行なう集まりであったが、目白駅前の再開発に際してできた目白駅周辺地区整備推進協議会に加わり、専門知識を活かして駅前広場等の計画を作り具体的な提案を行なった。普通そういう協議会は御用協議会だが、目白は元気な人たちばかりなので、常に「市民主導、行政参加」で活動してきた。 ・私たちの活動の特徴は「日常的に実用的に機能しないまちは、非常時に機能しない」という発想、そしてボランティア活動など含む全ての活動が駅前目白通り長さ2km、幅600mの中で行われている点だ。そして、いろいろな活動が目白駅周辺地区整備推進協議会を中心に、グルーピングされている。 ・目白は地盤がよく関東大震災時にも被害が少なかった。「そこそこ」安全なので、誰も助けてくれないだろうから、自分たちで防災まちづくりプランを作らなければいけない。そこでまちの調査をしたところ、自分の家から小学校へ行く間でさえ、危ないところがあると分った。対策を考えるため、住民へのアンケート調査を考えていたところ、「官民の協調による災害に強いまちづくりに関する検討調査」（内閣府・国土交通省）のモデル地区に選定された。そこで「目白レンジャー」「一つ目小悪魔」という目白の防災まちづくりのイメージキャラクターをつくり、アンケート調査を行なった。 ・目白は今、防犯面では危ないところだ。一般市民や新しくまちに入ってきた人たちは「防災」は町内会や消防団という既存組織の活動もあって、なかなか関わりにくい面があるが、「防犯」をキーワードにしたところ、60名もの活動メンバーが集まった。防犯をメインに据え、防災面については、目白は東京都「わが町の地域危険度」で評価が低いなど一定の情報を提供しつつ、アンケート調査やヒアリング調査をした。 ・その結果で得られたまちの情報は「カキコマップ」という形で整理して皆が使えるようにしている（都市計画協会のカバーページに今でもなっている）。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	有

発表４

グループ名称	**上町東町町内会**			
グループの属性	自主防災組織		活動地域	仙台市青葉区
テーマ	「小さな備え　大きな安心」防災用品の日常的な活用を工夫			
発表者	庄子リエ氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	･私たちの町は世帯数約1300戸、東･西･南の3町からなっている。各町は班に分かれている。 ･防災用品を揃えたきっかけは、平成15年11月、班長さんのところに2～3名が集まってお茶を飲んでいたとき、防災の準備をしたらどうかという話になり、すぐ行動に移すことになったことに始まる。 ･お金を掛けないように、100円ショップで買える物や手作りの品などを揃えた。内容は、リヤカー1台（班で利用）、各戸に配布したものは避難表示板、防災マップ、避難札、防災リュック（ラジオ付き懐中電灯、笛、防災頭巾、家族連絡帳、靴、乾パン、水が入っている）で、最小限必要なものをそろえた。費用は1戸当たり1050円だった。避難札は普段は玄関先に掛け、避難するときは裏返して、安否確認に使うものだ。 ･これが河北新報に、「防災訓練と備えで、安心満載、アイデア次第の手本」として取り上げられた（平成16年1月1日朝刊）。 ･その後班の防災訓練が仙台放送の取材を受けた。「実践訓練でおばあちゃんがタンスの下敷きになったが、笛で助けを求め、素早く応急手当を受け、リヤカーに乗せられて避難所に」「備えあれば憂いなし、というスローガンで訓練を終えた」として放送された。 ･私達の班はその後、町単位の防災訓練にリヤカーと防災用品一式を持って参加している。また、防災頭巾の指導など、体験訓練は大変身に付くものだ。 ･この経験を踏まえて、安全を守りたい。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	なし

発表５

グループ名称	**ひらつか防災まちづくりの会**		
グループの属性	ＮＰＯ法人	活動地域	神奈川県平塚市
テーマ	市民の立場から火をつけた耐震補強運動		
発表者	柏木巳喜子氏		
発表方法	‘防災かるた取り’実演、発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有

発表内容

【防災かるた取りの実演】

・子どもたちに楽しく防災を学んでもらうためにこの会が指導し、児童生徒などが制作した‘防災かるた’をステージ上で実演（篠原憲一代表が読みあげ、他の発表グループ有志も交えてのカルタ取り）

あなどるな地震の怖さ恐ろしさ
危険だよ地震のときのブロック塀
避難場所知っていたからまた会えた
災害は人の都合は考えない
助けてと知らせるための笛ひとつ
ろ過すればプールの水も飲めました
など

【発表】

・「防災カルタ」は小学校や自治会の防災に関する集まりなどで作ってもらう。全て手作りだ。カルタ大会や表彰式を行なったりもする。平塚市長が参加してくれたこともある。

・今年から「こども地震・防災スクール」を始めた。そこでもカルタをやる。このスクールは「こどもにも、防災を」という文化を作っていきたいと考えたからだ。

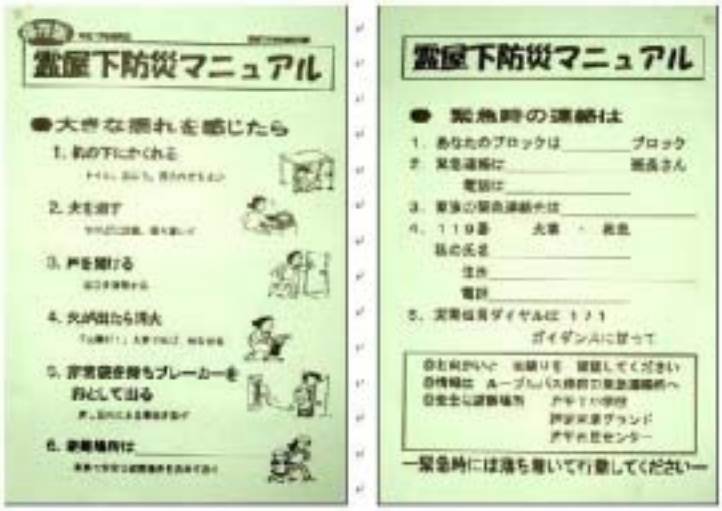
・私たちの活動は全て他の団体と一緒にやる。自分たちだけでできるとは思っていないからだ。

・私達は自分たちの関心事や自分たちに必要なことは、自分たちの手と足、ネットワークを使って、防災に関わるいろいろなことを実現してきた。

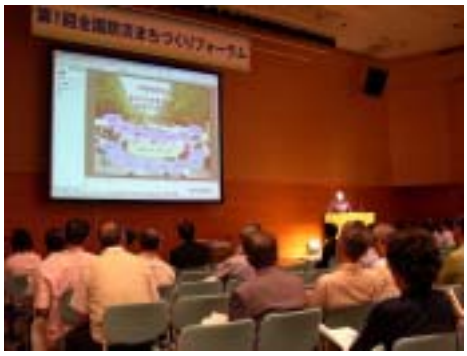
私たちが何かをするときのキーワードは3つ。「手づくりで、楽しんで、○○○」。○○○には各自が違うものを入れる。こういうやり方で、これからも続けていきたい。

資料	配布資料	なし	ブース展示	有

発表６

グループ名称	**霊屋下町内会**		
グループの属性	自主防災組織	活動地域	仙台市青葉区
テーマ	フェイス･トゥ･フェイスの啓発活動		
発表者	長内一彦氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･災害に対しては地域が鍵を握っている。私たちにできることはどんなことがあるか、という問題意識から活動をすすめてきた。宮城県沖地震の危険が言われているが、毎年地震が起きている。私達はもっと対策を急がねばならない。 ･霊屋（おたまや）とは伊達政宗の霊廟があることからついた地名だ。私たちの活動はまだ歴史が浅く、平成15年三陸南地震発生後、町民から「もっと情報がほしい」という話があったので、消防署から防災のパンフレットをもらってきて全戸に配布したことが始まりだ。次に、より地域の生活に密着したものをつくろうということで、児童を含む町民有志で「防災マップ」を作り、全戸に配布した。 ･町内会としての活動は「防災を考える会」開催と、「防災アンケート」の実施が最初だ。地震の被害を受けるだろうと考えている人がほとんどなのに、何も準備していないというひとが多かったため、本格的な活動を開始した。 ･平成16年には「災害に強い町づくり」というテーマで「青葉区まちづくり助成事業」に応募し認定された。災害に強い町はどうやって作るかだが、個々が災害に強くなることが地域の防災力を高めると考え、防災知識普及、家庭内での防災意識向上、防災準備、防災訓練を行った。 ･町内会では「緊急災害連絡所」を万一の時には必ず設置するようにした。平成17年には「防災マニュアル」保存版を配布（冷蔵庫にでも貼れるようなもの）。 ･体制面では、町内を6ブロックに分けたところ、連絡が円滑になった。 ･最近「高齢者の防災準備推進活動」（家具固定など）を宮城県建築士会の協力を得て開始した。8月の地震後、アンケートを実施したところ、身の安全対策はほとんどの人がとれてきた感じを持った。今後も「意識づくり」「まちづくり」を進めていきたい。  		
資料	配布資料	有（A４　1ページ）	ブース展示　なし

発表７

グループ名称	早稲田商店会（早稲田いのちのまちづくり実行委員会）			
グループの属性	商店会		活動地域	東京都新宿区
テーマ	商店街の活性化が達成する防災まちづくり活動			
発表者	久保里砂子氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	・早稲田の町にはいろいろな人、いろいろなグループがあるが、今日発表の 22グループの活動が皆違うように、「それぞれの人や組織は考え方が違う」ということを前提に、「それぞれが少しずつ動いてくれればいい」「そんな中に商店会としての動きもある」という考え方でやっている。 ・なぜ防災まちづくりか：早稲田の町は大学が2万人、周辺人口が2万～2万5千人くらいだが、夏休みに学生がいなくなるととても静かな町になる。10年前のそんな夏、お客さんがいないから何かやろうよ、といったのが始まりだ。1996年夏に「夏枯れ対策」として大学を借りてイベントをやったが、大学を借りる理屈として当時関心を持たれていた環境リサイクルを掲げた。空き缶とペットボトルの回収機「エコステーション」は缶などを入れるとゲームを始め、当たると餃子サービスなど商店会の割引券が出るようになっている。子どもは外を走り回って空き缶などを拾ってくるようになる。結果としてまちがきれいになる。子どもは1週間位で飽きてしまうものの、このときに落ちている缶がどんなに汚いかということを実感すると、ポイ捨てをしなくなる。 ・こういうことを通して、自分たちのやりやすいやり方で、面白いなと思うことをすれば皆ついてきてくれる、何かちょっと得するなということがあれば次もやってみよう、ということになる、ということを実感した。 ・エコステーションは全国90箇所あり、神戸の長田にもある。長田の人たちに自分たちのまちを守るのは自分たちしかないと聞き、そこから防災に入ってきた。 ・今私たちのやっているのは年5千円払うと30万円分の疎開費用が出る「震災疎開パッケージ」だ。何かあったとき他のところに助けてもらおう、ということだが、1年間何もなければ各地から特産品が届く。何か面白い、わくわくする切り口で災害を考えようというイメージだ。 ・この8月に実施した「防災キャンプ」では損保協会の「まち歩きキット」を使った。今回はまち歩きだけでなく、小学生が防災劇を作るということをやったが、小学生でも真剣に劇を作って保護者の前で上演することができた。 ・早稲田のまちではこんないろいろなことをやっている。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	なし

発表８

グループ名称	ひとりでも安全･安心まちづくり実行委員会		
グループの属性	任意団体	活動地域	福岡県北九州市
テーマ	ひとり暮らしの女性でもまちの安全安心に積極的に取り組む活動		
発表者	山口ひろこ氏他1名		
発表方法	寸劇形式	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	【寸劇形式】二人の女性が福岡県西方沖地震での体験などを語り合う形で、平成17年度全国都市再生モデル調査事業～ひとりでも安全･安心まちづくり～の趣旨、活動を紹介。(会話の背景を示すデータ、写真等をスクリーンに映写) （Ｙ：会社社長）Ｓさん、取材に来るといったのに遅いわね。 （Ｓ：フリーライター）お久しぶりです。よろしくお願いします。（名刺を渡す） （Ｙ）名刺が旧姓のままだわ。まだ独身なのね。 （Ｓ）ええ、あなたもまだ独身ですか？ （Ｙ）私はもう大独身よ。うちは母と二人暮らし。 （Ｓ）独居世帯が多くなるという新聞記事、ご覧になりました？ （Ｙ）身につまされるわね。どうする？私たち！ （Ｓ）ところで３月の地震の時はどうでした？ （Ｙ）私は休日で、母と二人でいたの。 （Ｓ）私はマンションの 11 階で一人暮らし。あわてて出たら隣の人に初めて会ったんですよ。新築マンションで組合もないし、顔を合わせることもなくて。 （Ｙ）今はどこもそうよ。 （Ｙ）私の事務所なんてこんなになっちゃった（床にものが散乱した写真提示）。本棚も倒れてしまって、片付けが大変で…。 （Ｓ）家具の固定なんてしてないですもんね。 （Ｙ）固定金具をあわてて買いに行ったもの。たぶん皆こういう備えはしてないと思う。初めて経験する地震だったので、すごい恐怖感があったよね。私たち北九州には地震はないと自信を持って思っていました。私は安全安心をキーワードに実行委員会を作ったから、市役所の安全安心課というところに、いろいろ聞きに行ったら、このマップをくれたの（小倉地区安全安心マップ）。 （Ｓ）これは犯罪状況で、防災じゃないですね。 （Ｙ）小倉は中心部が空洞化してひったくりとか犯罪が増えているから…。 私は「ひとりでも安全・安心まちづくり」をテーマにセミナーやフォーラムを開いているの。７月のフォーラムでは「３月の地震のときあなたはどうしていたか」ということでいろんな議論をしました。今度の日曜日は「私たち自身でマニュアルを作りましょう」というのをやるので、あなたも、ぜひ参加して！ （Ｓ）分りました。がんばりましょう。		
資料	配布資料 なし	ブース展示	なし

発表９

グループ名称	**まちづくり政策フォーラム**		
グループの属性	ＮＰＯ法人	活動地域	宮城県白石市など
テーマ	車イス生活者、障害者、高齢者の立場からの防災まちづくり （シルバーハウジング居住）		
発表者	佐藤公宥氏（まちづくり政策フォーラム（仮称）福祉部会代表）		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	・まちづくり政策フォーラムはまちづくりのさまざまな分野についての調査研究や政策提言などを行なっているグループだ。ここでは福祉と防災に関する取組みについてご紹介する。 ・私が生活している白石市シルバーハウジングは、一般世帯、高齢者、障害者の合同住宅だが、ここでの防災のあり方について、これから取り組む目標や内容をお話しする。 ・シルバーハウジングはユニバーサルデザイン住宅で、段差が全くなく、洗面所・浴室・トイレなども広さが十分あって車椅子の利用が可能になっている。避難に関しては、私の部屋は車椅子で通るので邪魔なものを省いている。各居室には緊急用ブザーが設置されており、普段はライフサポートアドバイザー（ＬＳＡ）という管理者が常駐している（平日8時～17時）。 （施設、設備を写真で紹介） ・8月16日の地震では、私や高齢者など、居住者自身がウッドテラスに出て確認を行なった後、市役所職員に点検してもらったが、夜間休日対策など、いろいろ課題があると感じた。つまり、実際に災害が起きてみると、シルバーハウジングといえども防災面では不十分な点もあった。 ・これからの私たちの展開としては、まず、ライフサポートカード、ヘルプカードなどを自分自身で作っておくことが大切と感じた。また、自分の居場所を皆さんにお知らせする上で、ＧＰＳ携帯電話をどういうふうに利用するか、住宅も耐震から免震にどうやって進めていったらいいか。また私たち自身が使いやすい防災マニュアルを作るなど、普及面についても考えていきたいと思っている。 		
資料	配布資料	なし	ブース展示	なし

発表１０

グループ名称	**ＮＰＯ豊前の国建設倶楽部**		
グループの属性	ＮＰＯ法人	活動地域	大分県中津市
テーマ	県境を越えた地域協力活動が生み出した防災まちづくり		
発表者	代表理事　木ノ下勝矢氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･私たちの住む場所は大分県と福岡県の県境にあり、行政の谷間地域になっている。県境では交通事故にあっても、少しでも大分県側だと福岡県の救急車は帰ってしまったり、ということが昔はあったそうだ。豊前の国建設倶楽部は 20 年ほど前から、県境を跨いだ地域おこしイベントを契機に、今では防災面でも両県の消防団と協力した活動など、県境を越えて活動を行なっている。 ･私達は「遊び心」をテーマに地域づくりをやっている。例えば、うまくいく訓練を 100 回やっても、あまり意味がなくて、訓練は失敗する方がいい。失敗する訓練をやろうということでいろいろやっている。 ･阪神･淡路大震災では、1 週間後に仲間 40 人が集まり、完結型のボランティアとして、2トントラックを2台調達し、1回 1,000 人分の豚汁が作れる鍋を持って行って、東灘区で4000人分の炊き出しをした。米や味噌も皆持参したが、こちらには「いいちこ」の製造元があるので協力を求めたところ、当初「災害時に焼酎なんて、会社のイメージが悪くなる」といってなかなかくれなかったが、粘って 4,000 本の焼酎をもらい差し入れした。日本では理解が得にくいが、外国ではアルコールは消毒や精神安定にもよいといって使うようだ。お配りしたところ「本当は飲みたかったんだ」と言って大事そうに受け取られた。 ･日本人はどうもかしこまって、訓練のための練習をしたりとか、いろいろやるが、失敗してもいいから楽しくやろう。普通はピラミッドのような組織を作り、責任者が上にたくさんいて、人数は何人来たとか言う話になるが、「顔の見える訓練」というか、遊び心を持って日頃から関わる、ということの方が大事なのではないか。 ･防災マップづくり：日頃から使っていないといざというとき役立たないものなので、普段は「観光マップ」として使い、いざという時は災害マップになる。どういうことかというと、いろいろな人の名前が載っていて、観光ではその人に連絡すると地域を案内してくれ、災害時にはその人に連絡するとその辺の安全を教えてくれる。そういう人と人とを結びつけるようなしくみづくりをやっている。 ･災害時に「遊び心」ということをいうと抵抗があると思うが、私達は「遊び心」を中心とした防災に取り組んでいる。 		
資料	配布資料　なし	ブース展示	なし

発表１１

グループ名称	**福住町町内会**		
グループの属性	自主防災組織	活動地域	仙台市宮城野区
テーマ	「生命の分水嶺･生と死を分けるもの」 ～住民参加型の町内会防災マニュアルの作成～		
発表者	町内会長　菅原　康雄氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	･自分たちの住むまちが地震で崩壊するという現実に向き合った時から、行政に頼らない、いわゆる自主管理意識が生まれる。 ･福住町町内会は会員927名、戸数332戸の規模であるが、個人情報をあえて盛り込み、各自の役割を明記した防災マニュアル（防災わがまち　自主管理マニュアル）を全戸に配布している。名簿作りは、町内会が普段から夏祭りや灯篭流しなどを通して住民の交流に力を注いできた経緯もあり、難しいと言われるものが2ヶ月で作成できた。 ･年1回の防災訓練は住民全員に役割があるため全員参加で実施している。また、災害時要援護者対策では、独居老人に対し家具転倒防止対策など、できる限りの防止対策を行なってきた。行政の援助を待っているのではだめで、まず自分たちが動き出すことだ、という意識も定着してきた。 ･中越地震の際には発災 10 日後に、町内会で集めた支援物資を車2台で、直接小千谷の町内会まで、寸断した道を迂回しながら届けたが、被災地で「生命の分水嶺･生と死を分けるもの」が何なのかを考えさせられた。防火防災訓練は万全であったとしても、一抹の不安がぬぐえない。被災地からの教訓では3日間は公助は望めず、自分の命は自分で守るということ、余震が続く暗闇の中で一番ほしかったのは「明かりと火」、そして時間の経過がとても知りたいと言うことだった。助かるか否かの境界線はその「空白の3日間」（発災から3日間）の恐怖心をいかに乗り切るかにあるということだ。 ･そのためには、いざというとき助け合える姉妹町内会を近隣市町村で作り、平常時からお互いの交流と親睦を図り、「顔見知り」になっておく必要がある。 ･近隣の町内会と防火･防災協定を結ぶ姉妹町内会提携はまだ実現していないが、近隣近県による町内会のネットワーク作りが急務であること、小さな町内会でも「住民の強い結束と危機感があれば大きな力になりうる」という新しい町内会のあり方を、仙台市福住町より全国に発信したい。 		
資料	配布資料　A4　2ページの文書	ブース展示	有（資料配布）

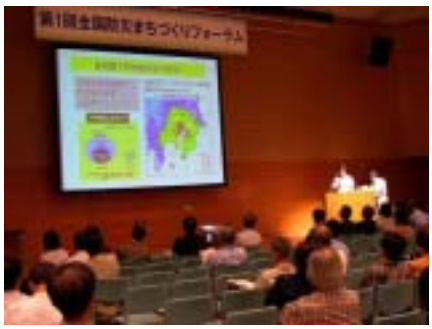
発表１２

グループ名称	**ＮＰＯながおか生活情報交流ネット**		
グループの属性	ＮＰＯ法人	活動地域	新潟県長岡市
テーマ	市民の情報まちづくり活動が役立った新潟水害		
発表者	理事長　桑原眞二氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･私どもは普段はまちづくりのイベントや交流活動をやって、イベントや祭りのレポートをインターネット上に公開するということをやってきた。 ･昨年の大水害時、以前まちづくり交流などをしていて人的交流があったまちを見に行ったところ、その町はインターネットでの情報発信ができなくなっていた。そこで私どもは簡単に情報アップできるシステム（ブログ）で、自治体に代わり、ＮＰＯの責任ということで情報発信した。ＴＶやラジオの情報と併せて、インターネット上の情報から、ボランティアの方などに大勢来ていただくことができた。普段から人の交流をやっておくと、助け合うことができる。 ･今回の水害発生直後は、ラジオ以外は情報遮断となった。防災無線もよく聞こえなかった。音声情報は聞き漏らしたり間違えたりするので役立たない。実は、インターネットやアナログの紙情報が一番役に立つ。そこで考えたのが、災害情報員＋ボランティアで、アナログの紙情報を地震直後に配布する仕組みを作り、自主防災に役立てる。配布用紙には二次元バーコードを付け、インターネット上の情報にもたどり着けるというようなものを作りたい。インターネット上にたどり着いたときに、そこに情報が集約されているというシステムを作り、紙とインターネットの融合というような展開をしていきたい。 ･また、インターネットの最先端の技術を使い、ＲＳＳという自動的に情報交流するシステムがあるが、これを表示できるシステムができたら、と考えている。 ･「町内連絡帳」について：災害時には千枚通しのようなもので該当項目に穴を開けるだけで、大量に配布できるようなものができたら、と考えた。 私の住む長岡越路地域は地震の5～6日後に全国に災害情報を配布した。印刷物は何回も繰り返し見ることができ、とても便利だった。私どもは地震直後に配布できるものはないか、と考えた。ただ紙情報は、災害時には電気が止まり、プリンターが使えなくなるので、あらかじめ町内のいろいろな連絡に使う用紙を印刷しておき、災害時にはチェックを入れるだけで、大量に配布できるようなものができたら、と考えている。 		
資料	配布資料　なし	ブース展示	有

発表１３

グループ名称	**鈎取ニュータウン町内会**		
グループの属性	自主防災組織	活動地域	仙台市太白区
テーマ	死傷者を出さない、崩壊建物を出さない、火災を出さない「出さない君」の活動		
発表者	町内会長　京谷国雄氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	・「出さない君」という活動は、地震が来た場合大きなテーマとなる「死傷者」「倒壊建物」「火災」を「出さない」ということだ。ではどうするか。当町内会は10何年前から防災体制をとっているが、一昨年の宮城県北部地震を契機に「出さない君」の活動を始めた。 ・いろいろ対策があるが、今日は時間がないので、一番大切な「死傷者を出さない」ためにはどうするかについてお話しする。 ・まず、全世帯の家族調査をする。これはなかなかプライベートのことで出してくれないが、家族構成、障害の有無、職業なども書いてもらうようにし、一昨年12月に完成した。 ・データを作ってみると、うちの町内会の年齢層は50～60代が多く(38%)、数年経てば高齢化を迎える。そのとき防災組織をどうするか。60歳以上が全員入会する「ひまわり会」というものを作っているが、これ単なる老人会ではなく、連絡や救命などの手伝いをする。現在、152名が賛同して入っている。災害時には向こう三軒両隣をチェックし、自分たちの命は自分たちで守るというものだ。 ・「災害弱者居住マップ」は要介護者、一人暮らし70歳以上、支援者70歳以上の居場所に印を記入している。個人名はこのマップ上にはなく、透明シートに印刷した「住民マップ」を重ねると分るようになっている。 ・なお、こうした名簿の管理などは「出さない君」防災庫というものがあって、その中に入れている。 ・今お見せしているものは啓蒙運動のために作っているものだ。皆さん各ご家庭でこういうものをぜひ用意してもらいたい。 		
資料	配布資料	有（町内会だよりなど　A4　11ページ）	ブース展示　有

発表１４

グループ名称	**東京駅周辺防災隣組（東京駅・有楽町駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会）** （＊審査対象外）		
グループの属性	任意団体	活動地域	東京都千代田区
テーマ	業務市街地で展開する防災まちづくり		
発表者	（財）都市防災研究所（防災隣組事務局） 土肥英生氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	・防災隣組を作った背景：首都直下型地震が迫っており、その際には一都三県で650万人の帰宅困難者が発生するとの予測がある。鉄道は全面的に止まり、自動車は環7の内側は通行禁止になる。千代田区は昼間人口が100万人（夜間人口の25倍）あり、東京駅周辺には約20万人の帰宅困難者が流入する見込みであるということが明らかになっている。 そこで千代田区では皇居前広場など4箇所を帰宅困難者支援場所に指定し、情報提供などを行い、道路の通行が可能になったら、がんばって帰宅していただく、ということを考えている。このため、帰宅困難者避難訓練の実施のほか、大学との応援協定、防災情報システムの構築などを進めている。 ・大手町・丸の内・有楽町地区には大手企業などが集まっており、そういう中で公に任せるのでなく、基本的に自社の社員・顧客の救護は自己責任であり、事業所同士が相互扶助をしていくべきである、ということを考え、2年前防災隣組を立ち上げた。 ・これは、当地区はわが国を代表する業務地域であり、ここが災害時に危ないのではないかという海外の懸念に対して答えを出していくということ。また国内の他の業務地域に対抗して、我々の地域は安全で魅力的であるということを示していくこと。加えて事業の継続性を確保していくこと（BCP）も考えている。 ・現在61の企業・団体が参加しており、具体的な活動としては、帰宅困難者避難訓練を千代田区と共に実施するなど、さまざまな活動に着手している。 ・先日の千葉北西部を震源とする地震や宮城県沖を震源とする地震の後には会員企業担当者にアンケート調査を行った。千葉県北西部の地震では、休日でもあり、会社と連絡が取りにくい状況が目立ったが、宮城県沖では、平日で会社にいたということもあるが、先の地震の教訓を元に多様な通信手段を使って、仙台周辺の関連事業所も含めて比較的すぐに連絡、安否確認ができたという結果がでた。 こうした経験などを共有し、ノウハウを積み重ね、安全に仕事のできる環境を実現していきたいと考えている。 		
資料	配布資料	なし	ブース展示 有（ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ配布）

発表１５

グループ名称	**泉中央地区防災協議会**			
グループの属性	任意団体		活動地域	仙台市泉区
テーマ	泉中央駅周辺の6事業所による応援協力協定と地域支援活動			
発表者	山田郁夫氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	･泉中央駅周辺に建っている大型の6つの建物･施設の事業所が集まって、災害対策としてどういうことをやっていったらいいか、ということを話し合った。 ･泉中央は仙台副都心の商業集積地域で、泉中央駅は仙台駅についで乗降客の多い駅である。大型の商業ビルは大規模な集客があるので、大地震でもあったら自分のところだけで精一杯という状況があるが、自分のところの被害が比較的軽くて、隣のビルや周辺が大変なことになっている場合、大型商業ビルであるということを活かした支援もできるのではないか。 ･そこでビルごとに、建物のエントランスホールの開放や被災情報の提供といった自分のところでできる地域支援活動内容をそれぞれがピックアップした。行政の支援が届く前にできうることを挙げ、防災訓練などを通じた日常的な訓練の実施や、普段の意識面でもプラスになることがあるのではないか、ということでやってきている。 ･まだ結成1年半で訓練もこの秋で2回目ということで、今後続けていく中ではもっと高度なこともできるかもしれないが、今のところはこういった「情報を共有する」レベルだ。ただ、今まで関心の薄かった隣のビルの防災対策について、こうした会を作ったことで情報交換ができるなど既に成果が出ており、いろいろな面で有意義な試みであると考えている。 			
資料	配布資料	有（A4　2ページ）	ブース展示	なし

発表１６

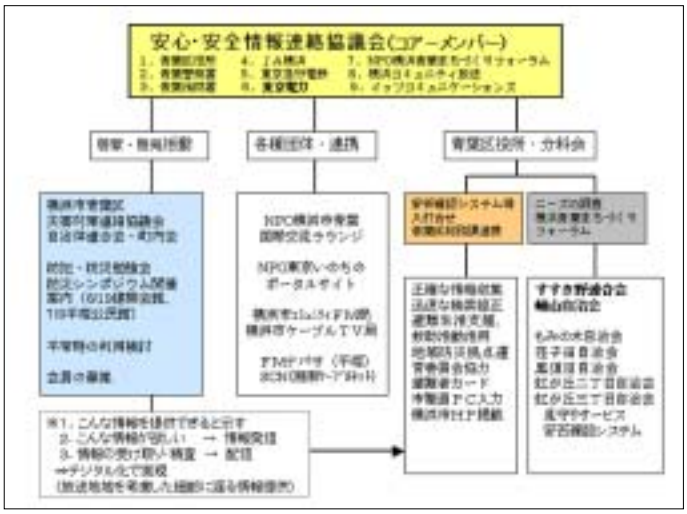
グループ名称	**ＮＰＯ江東区の水辺に親しむ会**			
グループの属性	ＮＰＯ法人		活動地域	東京都江東区
テーマ	防災対策を考慮した水と緑のネットワーク再生構想			
発表者	奈良朋彦氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･仙台は杜の都というが、東京はたくさんの川と運河に囲まれた都市だ。特に東京駅―お台場―浦安―浅草の間は運河が多いが、徳川家康が江戸に入った時に運河を作ったという歴史的な経緯がある。運河の半分以上は水害の危険で埋められたが、江東区にはまだ残っているものも多い。こうした江東区の水辺の魅力を楽しみながらまちづくりをしていこうというのが、この団体の目的だ。 ･船を使ったり、緑を使ったりして遊ぶのだが、お隣の中央区の神田川･隅田川を守る会と共同でイベントをやったりもする。船にお客を乗せて、東京の水辺を知ってもらうイベントもやったが、「常盤橋船着場」（東京都が防災のために指定している）周辺で船が座礁してしまった。 ･そこで「防災に使える船着場」とはどういうものかということを調査した。川べりの防災公園（清澄公園）の近くなら、公園に避難する人も多く、こちらがいいのではないかとか、運河沿いは火が回ってこないので、歩けるようにしたらいいのではないか、といった防災上の提案をしてきた。 ･同時に、意識調査をしたり、行政･大学･小学校･商店街とで話し合ったりして、いろいろなことが分ってきた。例えば①非常時に使えるようにするためには普段から使っていないとダメ。防災船着場といっても災害時だけ使うのでなく、普段から使おうという意見を共有　②使うためにはきれいでなくてはダメなので、マンション建設時に水辺空間を意識した開発をしたり、船に客をもっと乗せてアピールしたり、ということをした方がいい　などだ。 ･私たちは楽しみながらこうした検討を重ね、防災対策を考慮した水と緑のネットワークの再生や、普段も楽しい水辺空間の提案などを行なっている。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	有

発表１７

グループ名称	(社) 宮城県建築士会		
グループの属性	社団法人	活動地域	仙台市青葉区
テーマ	「世代継続する地震に強いまちづくり委員会」の活動		
発表者	松島支部支部長　土井儀憲氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･建築士会には各種委員会があるが、今年度に立ち上げた「世代継続する地震に強いまちづくり委員会」についてお話しする。 ･建築士会は耐震診断や応急危険度判定などハード的な事業を手がけてきたが、いずれも必要とされるときに出向く、自主的でない対応型の事業だ。 ･防災は広く誰もが長く意識することが大切だ。この委員会は耐震診断をバックアップしながら、広く長く耐震意識を持っていただくにはどうしたらよいかと考え、そのためのソフト事業を展開するために立ち上げた。 ･委員会のメインテーマはあくまでも「世代継続」だ。大人から子供へ、子供から孫へ、お年寄りも中学生も誰もが共通の話題による防災意識を持ち、それを伝承することが、防災意識を高める1つと考えた。いかに「世代継続」をさせるか。「まず若者と大人を会話させること」「話題は木造住宅の耐震診断」我々は物事を単純明快に考えた。大人は経験と知識と情報をたくさん持っている。しかし年が増すにつれ、これらをオープンにする機会は減り、閉鎖的になってくる。子どもは経験や情報量は乏しいが、行動力や発想力は豊富で限りがない。世代の違うものが1つのテーマで話合えればすばらしい会話が成り立つのではないか。そこで「世代継続」をさせる3つのステップを考えた。 ･実際に取組みを行った松島町の経験をご紹介する。 〔ステップ1〕若者へは松島中学校で耐震診断の授業を行なった。1クラスに建築士会会員が3名付き、2年生4クラスに3時間授業した。また、松島町で大人への講習会を行なった。〔ステップ2〕松島町の地区集会所で若者参加型の合同講習会を行なった。大人は基礎や筋交いなどは経験上知っており、若者はそうした知識はないが耐震診断の基礎となる面積計算は得意、ということで大人		

	に教える光景をよく見た。共通のテーマのもと、世代ごとに持つ知識･能力を出し合い、協力して成果を出した。〔ステップ3〕世代間を越え世代継続する地震に強いまちづくりに取り組む。子供達は自ら耐震診断の実践に臨み、大人はそれに協力するようになった。今年の夏休みには耐震診断とともに、通学路のブロック塀･看板の危険性チェック、及びそれらを含めた防災マップを作った。 ･私たちは建築士なので、耐震診断で世代継続に取り組もうとしているが、防災意識を継続させるお手伝いはいろいろあると思う。非常連絡方法などは今はいろいろなものが出ているので子供に聞いた方が確実のようだが。常日頃世代を超えて防災を話題にし、若者も参加する自主防災組織ができれば理想だ。 ･当委員会は松島町での経験を全県に展開できるよう立ち上げたばかりだ。これからは学校や地域社会で防災教育や耐震化の促進を図り、その上で防災意識の異なる世代の共通の話題となるよう環境を整え、地域全体の防災力を向上させたいと考えている。 			
資料	**配布資料**	**なし**	**ブース展示**	**有**

発表１８

グループ名称	**安心安全情報連絡協議会**			
グループの属性	任意団体	活動地域	多摩田園都市（神奈川県横浜市青葉区）	
テーマ	東急ニュータウンの情報インフラを生かした防災まちづくり			
発表者	事務局長　寿乃田正人氏			
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有	
発表内容	・「官民の協調による災害に強いまちづくりに関する検討調査」（平成15年度/内閣府・国土交通省）のモデル地区に「東急多摩田園都市防災まちづくり」が選ばれ、「サロン・ド防災」という場を作ったりもした。プロジェクト終了後、活動を持続発展するためにいろいろ手段を考え、こういう会を立ち上げた。 ・東急多摩田園都市は、多摩川を越えた川崎市～横浜市に繋がる約5000haの地域で、現在57万人の住民がいる。 ・去年の1月からFMサルースというコミュニティFMで、東京大学生産技術研究所目黒公郎教授をはじめとする防犯防災の専門家をお呼びしてお話を聞く定時の番組を作った。これは、何かあったときに、たくさんの情報を、たくさんの人に、いっぺんに流したいという思いからで、こういう場を作って来てもらい啓蒙活動をして、それをCATV、インターネット、コミュニティFMを使って、いっぺんに情報を流した。 ・当会の設立目的は、簡単に言えばたくさんの人に、一度に、正確な情報を流すこと、これが普段からやっておくこと、そして発災したとき有効だろうと考えたためだ。それには、まず地域に根付いて、地域が本当に必要としているものを掴もう。ということで協議会を作り、皆さんの意見を把握した上で、区役所や消防署などと一緒になって考えていこうとしている。区役所などからも情報を頂いており、これから会を大きくしていこうと考えている。 ・実際何をやるか。iTSCOM（CATV会社）にお願いして、地域情報の収集と発信の仕組みづくりや、メールに代わる新しい情報伝達の実験、「見守りサービス」（NTTデータ）を使ったいろいろな実験をやってみようと思っている。 ・全国でコミュニティFMが170局、それにCATVが一緒になれば大きな情報連携ができるだろう。今後の課題と考えている。  			
資料	配布資料	なし	ブース展示	有

発表１９

グループ名称	**国分町交番支援システム分町Ａ－Net運営委員会**		
グループの属性	任意団体	活動地域	仙台市青葉区
テーマ	地域の安心、安全を図るために防犯協会、安全協会、町内会、警察が連携して作り上げた会員制メール配信システム		
発表者	白津守康氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･国分町は東北1の繁華街、24時間眠らない街だ。私どもはそこを舞台にメールマガジンの配信をしている。 ･皆さんが旅行に行って何かの災害に遭ったら何をまずするか？　まず「情報を得たい」とは誰しも思うこと。情報があってはじめて人は安心する。 ･今年の4月にこの近くの中央通でトラック暴走事件があり、3人が亡くなった。私はその時家族で一番町にいたが、友達から携帯に、「3人が通り魔に襲われ犯人は逃走中」という連絡が入った。小さい子どもを連れていたので戦慄して国分町交番に電話したところ、全く間違った情報だった。「情報の正確さ」は非常に大切と実感させられた。 ･A-Netの「A」は「安心安全のエリア」のAだ。国分町交番と国分町連絡協議会（防犯、交通、PTA、街の役員、ビルのオーナー、商店主など。会員数500名を目指している）により、防犯情報･火災情報･地震情報などについてメールマガジンが配信されるシステムだ。例えば、8月5日はボヤ鎮火情報が来ている。先日の地震では、「国分町管区内では現在のところ被害は確認されておりません」というものが来た。私どもは国分町に店舗を持ちながら、近隣に住んでいるので、こういう情報が来ると安心できる。 ･この方法では一瞬で情報を配信でき、非常に有効だ。これは商店主など限られた人に配信されるが、商店主は店に来られた観光客や買い物客に身近な災害情報や交通情報を正確に提供できる。このメール配信システムはひとつのプラットホーム、情報を集めて配信する、ということであるから、（防犯のために作ったものだが）防災にも役に立つと思う。例えば消防署さんも提携していただき、いろいろな細かい情報を流していただければ、私たち市民もいい情報を得られるのではないか。結局市民はいい情報なら誰から得てもいい。 ･5250円／月なので、ぜひ皆さんも活用して頂きたい。 		
資料	配布資料	なし	ブース展示　有

発表２０

グループ名称	**NPO日本公開庭園機構**			
グループの属性	NPO法人		活動地域	東京都国立市
テーマ	緑地の普及推進が貢献するまちの防災性能			
発表者	代表　佐藤哲信氏			
発表方法	発表者による説明		ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･客席両側に並べてあるパネルは私たちのもので、セミナーなどに利用しているものなので、ぜひ見て頂きたい。 ･先ほどからいくつかの発表で「ブロック塀」という話があったが、私どもはそれをとことんつきつめている。私たちが街歩きをするとき、大人の目線で物事を見るが、私はいい風景、気になる風景があると、立ったままと、しゃがんだものと同じ風景を写真に撮る。しゃがむと10歳くらいの子どもや車椅子利用者の目線になる。子どもたちが集うはずのところで危険がたくさんある。首都直下型地震の被害想定を国立市に当てはめると、1000件のブロック塀が倒壊することになる。 ･「安全緑地の提唱」を見て頂きたいが、ブロック塀を生垣にするだけでなく、「角地の1m、道沿いの30cm」を低い植え込みにする。というのは、その場所は何かのとき、子どもも大人も頭や心臓が隠せる空間になるからだ。 ･私たちの家は皆、道に面している。道がないと建築確認がとれない。自分の家が接している道を、自分の家や庭を掃除したり、打ち水や雪かきをしたりするように、自分たち一人ひとりで安全な道として守ってほしい。 			
資料	配布資料	なし	ブース展示	有（ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ等配布）

発表２１

グループ名称	**ＮＰＯ都市防災研究会**		
グループの属性	ＮＰＯ法人	活動地域	神奈川県横浜市
テーマ	想定外の想定		
発表者	事務局長　中村栄助氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	なし
発表内容	･当会は阪神･淡路大震災直後に震災についてよく考えようということで設立され、昨年2月にＮＰＯ法人となった。 ･活動は、ニュースレター（年4回）、小冊子（2年に1回）、研究会（年1回）行なっている。小冊子はどう減災するか、といったテーマのものを出しており、研究会は横浜市内で一般参加者を募り行なう。 ･活動の中心は、町内会が訓練や地域マップづくりを実施するときなどにお手伝いをすること。行政、企業、町内会の連携をとることにある。まだ完全な形にはなっていないが、ＨＰで「相談箱」を作っている。災害は経験者の意見は非常に貴重だ。神戸の方は「阪神･淡路大震災のとき、タンスの下に入った子供を助けようとしたが、スリッパがなかったので足が血まみれになった。やっとの思いで傍に行くと、テコになるものがなかったのでタンスが持ち上がらなかった。そのときどうするか、ということを常に考えておくことは必要だよ」といわれた。 ･防災訓練はいろいろなことが行なわれているが、やはり「想定外の想定」はある。災害時には地域、地形、人、住まいの構造など、それぞれ置かれた条件が違う。そういう場面場面の想定をしっかりする。もう1つは、訓練はリピートが大事だ。私は訓練のあとに「自分の身につけてくださいよ」と必ず言う。 ･東京から横浜までサバイバルウォークがあったが、水を持ってリュックを背負って一番に着いたという人がいるが、歩く競争ではない。一番重要なことは、いざというときはメインの道を歩くこと、昼間歩くことだ。瓦礫があっていつもの道と違うということもよく想定しておいたほうがいい。 ･当会は防災まちづくり活動をいつでもお手伝いをする。ご連絡いただければ一緒に活動していきたい。 		
資料	配布資料　なし	ブース展示	なし

発表２２

グループ名称	**国分寺市民防災まちづくり学校**		
グループの属性	自治体	活動地域	東京都国分寺市
テーマ	市役所が誘発に成功した市民主体の防災まちづくり活動		
発表者	国分寺市都市建設部都市計画課まちづくり推進担当係長　小山則夫氏		
発表方法	発表者による説明	ﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	有
発表内容	･国分寺市は東京都の真ん中辺に位置している。市では30年ほど前から「市民防災まちづくり学校」というものをやっている。これは、市民が知識を得るだけでなく、得たものを何らかの形で地域で活かすきっかけ作りになることを目的にしている。 ･6月～3月まで 11 回開講している。午前は講義、午後は市職員が説明しながら現場の確認をする。外部講師の専門的な講座もあるが、実際に現場を知っている市の職員が、細かい内容を説明する。 ･防災だけでなく、環境もやっている。午後は外で午前中の座学を確認する。まち歩きをして、危険な場所を確認しようとする人もいる。また、応急救護の方法を学ぶということもやっている。 ･効果としては、市民と市職員が1年間同じ時間、同じ場所を共有するということでお互いを分かり合い、自然に理解できるようになることだ。この人間関係は、地域で活動するときにも非常に役に立つ。また、個人の知識の蓄積でなく、学校終了後は地域に戻って防災活動を促す。修了者の中から承諾を得て、市民防災推進委員として、市長認定を行なっている。これは地域で活動するときにしやすいように、という市民の要望を受けたものだ。 ･大切なことは、市職員の対応だ。自主的な活動だからといって、全部を民間に投げるのではなく、ずっと関わり続けることが大事だ。これが市民と職員の協働に大きく繋がってくる。なぜなら、最終的には「人間関係」が非常に大事で、防災まちづくり学校はそれを作る上で、市民にとっても、職員にとっても非常に重要な役割を果たしているのではないかと思う。 		
資料	配布資料	有：メモ欄付きﾋﾞｼﾞｭｱﾙﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ内容	ブース展示　なし

②全国防災まちづくりフォーラム審査講評会（17:20～17:35）

1）審査方法･審査員

・審査員と発表グループによる投票結果を踏まえて、審査員による各賞の審査が行なわれた。（16:20～17:20）

■審査員

審査員長	伊藤　滋	早稲田大学教授、（財）都市防災研究所会長
審査員	京　英次郎	仙台市消防局消防司令長、地震防災アドバイザー
	小松　洋吉	東北福祉大学ボランティアセンター教授
	高橋　郁男	仙台市消防局危機管理監
	武田　文男	内閣府大臣官房審議官（防災担当）
	増田　聡	東北大学大学院教授
	丸谷　浩明	京都大学経済研究所教授、前内閣府災害予防担当企画官
	村主　竹子	仙台市婦人防火クラブ連絡協議会
	吉田　浩二	（社）日本損害保険協会常務理事

2）表彰式

最優秀賞及び日本損害保険協会賞	今後の活動展開の中で､地域社会の災害に対する耐性向上の効果を最も期待できる防災まちづくり活動に授与	大岩２丁目自主防災会
応用賞	活動目的、手法等、他地域で応用可能な利点を有している活動に授与	（社）宮城県建築士会
発案賞	活動目的、手法等に新奇性があり、他地域でも参考にしうる活動に授与	早稲田商店会
表現賞	プレゼンテーションが最も優れているものに授与	ひとりでも安全･安心まちづくり実行委員会
最多得票賞	審査員の累積得票数が最も多い活動に授与	（社）宮城県建築士会
審査特別賞		鈎取ニュータウン町内会

大岩2丁目自主防災会(左)は最優秀賞･日本損害保険協会賞を受賞

応用賞、最多得票賞のダブル受賞の宮城県建築士会土井氏(右)と、審査特別賞受賞鈎取ニュータウン町内会京

３）伊藤滋審査員長講評

今日は２２の事例を私たちは本当に勉強させていただいた。専門家といえども知らないことがこんなにもあったのかという印象を審査員の皆さんもお持ちと思う。私は今日の話をお聞きしながら、時代は変わっていると思った。防災とか防犯とか、安心と安全に関わることは、役人と学校の先生がもっともらしいことを言って２０世紀は済んできた。２１世紀はＮＰＯのような非常に元気な活動が展開され、役人と教師はそれを勉強するという状況になってきたかと思っている。

もう一つ重要なことは、今日発表なさった方は比較的ご高齢で、私と同じ世代の方がきちっと発表なされていて、ああ我々はまだ大丈夫だ、高齢者も世の中にい続けられる領域がこんなにも広く展開していると思った。これも２１世紀になって新しい生きざまが展開されたということで、今日はいい機会を皆様から与えて頂き感謝している。

小泉総理が日本の自然災害に関し、「国民の皆様方がいろいろな点で準備をすることを継続するように、災害に取り組む活動を“国民運動”として長く展開するように」と言われた。その第１回が仙台からスタートする。そういう意味でも今回のフォーラムは意義のある機会になった。こういう意味でも皆様のご協力に感謝いたします。

最優秀賞の「大岩２丁目自主防災会」は長い歴史を背負う自主防災組織で、「東海地震で静岡は大変だ」といわれたときから活動されてきた。最近取り組み方を改められたと言われたが、取組みを変えるという節目節目の仕事は非常に大事だ。いってみれば日本の巨大地震対策のスタートからずっと防災まちづくり活動を継続されてきた“正統派中の正統派”の活動ということで最優秀賞にさせていただいた。

審査特別賞は当初の予定にはなかった賞だが、鈎取ニュータウン町内会の『出さない君』が審査員の中で非常に分りやすいと好評で、表彰の対象とすることになった。

審査員長：伊藤滋早稲田大学教授

応用賞、最多得票賞のダブル受賞をした（社）宮城県建築士会（左）

３）懇親会（17:40～18:00）

・審査講評会後、発表グループや参加者、審査員等フォーラム関係者の交流を目的に、発表会場で立食パーティ形式の懇親会が行なわれた。

（３）関連プログラム

①ＮＰＯ日本公開庭園機構のリレーシンポジウム「緑化による防災の道づくり･まちづくり～太平洋沿岸リレーシンポジウム～」（10:00～12:00）

■リレーシンポジウムについて（ＮＰＯ法人日本公開庭園機構　佐藤哲信代表）

このリレーシンポジウムは本日の仙台市を皮切りに、次年度以降、南海・東南海・東海・首都直下地震への対策が求められている高知市、名古屋市、浜松市、東京都国立市で毎年順次開催していく予定である。開催主旨は、道、まちの安全に対して、地震で倒壊の危険があるブロック塀を緑化して「安全緑地」を作り、地域道路とまちの安全確保と美しい景観づくりを進めることを提唱するもので、「安全緑地」の考え方、作り方の紹介とともに、国立市、世田谷区、小金井市、日野市に作られた「安全緑地見本園」など事例を、パネル展示を含めて紹介する。また、各開催地でオープンガーデン、「安全緑地」づくりに取り組んでいるグループによる発表なども行なう。

■「仙台の緑、道沿いの緑、オープンガーデン」

（オープンガーデンみやぎ次期会長　瀬上氏、
（株）泉緑化社長　蒲田秀夫氏（「オープンガーデンみやぎ」協賛企業））

「オープンガーデンみやぎ」（事務局仙台市 1998 年発足）は庭造りが大好きな人たちが集まって、自宅の庭を公開し合い楽しむグループで、会員数は現在 320 名おり、その他に造園や園芸材料等の企業 36 社が協賛企業となっている。具体的な活動としては、自宅の庭を公開してくれる庭主（46 名）のガイドブックの配布、講演会、庭つくりに関わる講習会、海外視察などである。ガーデニングを楽しむ人の交流と同時に、「小さな社会貢献」として、自分の庭を美しくすることで住んでいる地域を美しくし、植物を育てることでまちの自然環境を学び、守ることを目指している。

「防災まちづくり」としては、美しい庭を作り、通る人に庭が見えるようにしつらえるという個人の行動は、塀の緑化だけに留まらず、近所づきあいの活発化や子供の見守りへと発展する。こうしたことがいざというときの助け合いに繋がると考えている。また、個人の庭つくりが隣近所にも影響を与え、あちこちの家で庭つくりが盛んになっただけでなく、皆で道路に花を植えてきれいに管理する活動へと発展した地域があり、マスコミにも取り上げられた。道路のメンテナンスを市民がするため行政にも好評で、今では行政・市民・企業のパートナーシップにより、駅東口宮城野通りの緑化、本町２丁目の公開空地の花壇化（建て主を説得）などが行なわれた。私たちの活動は公共の場にも広がっている。

■「緑化による防災の道づくり･まちづくり」（日本公開庭園機構佐藤哲信代表）

ブロック塀の大震災時の危険や交通安全上の問題点を紹介。その対策として、「緑化による防災の道づくり・まちづくり」の考え方とともに、東京都国立市などでの市民が作るまちの緑「道沿いガーデン」や、東京都多摩地区でのブロック塀の生垣化と隅切りによる「安全緑地」、通学路遊休地などを利用した「安全緑地見本園」をスクリーン及びパネルによって紹介。

②(社)日本損害保険協会プレゼンテーション『“ぼうさい探検隊”マップコンクールの紹介」
（（社）日本損害保険協会生活サービス部ＮＰＯ･防災グループ担当課長宇田川智弘氏）

（15:55～16:20／活動発表会と審査講評会の間に実施）

（社）日本損害保険協会が推進している“ぼうさい探検隊”活動の主旨、活動事例について講演とビデオにより紹介。

また“ぼうさい探検隊”活動を実施した宮城県内小学校関係者より「この活動は子どもたちが自分たちのまち、人を知るものとなった。中学生くらいになると、今の子供は（塾に通うことなどが増え）まちに顔が見えなくなってしまうが、自分の身は自分で守れるように、私は今、子供の成長に応じたステップアップを企図している。具体的には、家具転倒防止技術講習を実施し、製作した器具を自宅に取り付けさせ、次に親子で地域の高齢者宅に訪問して取り付けるというものだ。“ぼうさい探検隊”の経験はこうした防災教育の第一歩としても、大変よい体験であった」という実施体験談が語られた。

２．企画･準備

（１）企画･準備の経緯

月日 (平成17年)		内　容
3月4日	民間と市場を活かした防災力向上に関する専門調査会第2回防災まちづくりワーキンググループ	･防災フェア 2005 の場を活用した防災まちづくり関係者の相互発表会、表彰制度、フェイス･トゥ･フェイスのネットワーク構築活動について提案(内閣府)
3月～		･企画骨子の検討、及び仙台市消防局防災フェア 2005 担当部署への趣旨説明、開催準備要請（内閣府）
4月21日	民間と市場を活かした防災力向上に関する専門調査会第3回防災まちづくりワーキンググループ	･「全国防災まちづくりフォーラム」開催を決定
5月	防災まちづくりに関わる仙台市内関係団体等への趣旨説明、開催準備協力依頼	･仙台市震災対策市民会議、東北福祉大学ボランティアセンター、安全･安心まちづくり女性フォーラムin仙台関係者への趣旨説明、及び企画･準備に関わる協力依頼
6月2日	「地域住民の手で行う防災まちづくりを考える会」開催	･全国防災まちづくりフォーラム開催気運醸成のためのプレイベント（内閣府、都市防災研究所主催） （＊イベント概要は次頁参照）
6月～	企画運営の詳細検討 地元市民団体、専門家等による開催ＰＲ活動等	･メーリングリスト立ち上げ（県内ＮＰＯ「まちづくり政策フォーラム」スタッフが設営管理） （参加者）防災まちづくりに関心のある市民団体関係者･研究者･企業関係者、及び仙台市･内閣府･事務局（（財）都市防災研究所）担当者 （趣旨）フォーラム開催に向けた交流、フォーラム企画提案検討、事務連絡 ･地元開催イベント等で防災まちづくりへの関心喚起と「全国防災まちづくりフォーラム」開催ＰＲ
7月21日	民間と市場を活かした防災力向上に関する専門調査会第4回ワーキンググループ	･「全国防災まちづくりフォーラム」企画案の検討
8月		･企画、運営の詳細確定 ･参加団体募集（宮城県内） ･宮城県外の防災まちづくり活動団体への参加要請
9月4日	第1回全国防災まちづくりフォーラム開催	

（2）プレイベント「地域住民の手で行う防災まちづくりを考える会」

ｉ．開催日時：平成 17 年 6 月 2 日（木）14:00～17:00

ii．場所：せんだいメディアテーク　スタジオシアター

iii．主催：内閣府、（財）都市防災研究所

iv．参加者数：約８０名（仙台市震災対策市民会議関係者、安全･安心まちづくり女性フォーラムin仙台関係者、東北福祉大学ボランティアセンター関係者、地元建築業界関係者等）

ｖ．開催のねらい

・仙台で防災まちづくりを行なっている、または防災まちづくりに関心のある市民グループや研究者などに対し、「全国防災まちづくりフォーラム」の開催をアピールし、幅広い参加を促進する。

・本年の「防災フェア 2005」の主要テーマのひとつに予定されている住宅の耐震補修について、市民による活動事例を紹介し、防災まちづくり関係者及び建築関係者の関心を喚起する。

vi．プログラム

○ショートレクチャー（14:00～15:30）

・**「地域住民の手で進める防災まちづくりに期待するもの」**

内閣府防災統括官付企画官（当時）　丸谷　浩明氏

（中央防災会議民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会、及びワーキンググループについて。同ワーキンググループで開催を決定した「全国防災まちづくりフォーラム」の趣旨と企画内容について）

・**「耐震補修普及の住民運動顛末記」**

ひらつか防災まちづくりの会代表　篠原　憲一氏

顧問　中橋　徹也氏

（ひらつか防災まちづくりの会が行なう住民による耐震補修普及運動の紹介）

○意見交換会（15:40～17:00）

・東北福祉大学ボランティアセンターにおける行政、町内会等と連携した防災まちづくりの取り組み紹介（東北福祉大学ボランティアセンター教授　小松洋吉氏他）

・ショートレクチャー講師と会場の市民との意見交換

３．仙台を中心とする地域の防災まちづくり活動の現状

仙台市では市民による防災まちづくり活動は自主防災組織の活動が中心となっている。仙台市の自主防災組織の組織率は大都市としては組織率が高く、89.9%（平成 17 年 1 月現在）にのぼる。自主防災組織の中には今回の全国防災まちづくりフォーラムで発表を行った団体のように、地域の実情を踏まえて活動内容を工夫するなど積極的な取組みを進めている団体もある。ただしこのような積極的な活動組織は多くはなく、活動のマンネリ化や活動参加者が同じ顔ぶれから広がらないなどの悩みを抱えているところも多い。宮城県沖地震の発生確率が高く、自治体等関係機関による防災に関わる情報提供や啓発活動などがたびたび行なわれていながら、市民一般の防災対策や防災まちづくりへの関心は必ずしも高まっているとはいえない状況にある。

防災に関わるボランタリーな市民団体については、災害救援ボランティア分野では宮城レスキュー・サポート・バイク・ネットワーク等地域内外によく知られた団体やサポート組織が存在し、中越地震などでも活発な支援活動を行っている。しかし、防災まちづくり分野では、近年、東北福祉大学ボランティアセンターが町内会や市消防局等と連携して地域防災コーディネーター養成講座や防災に関するフォーラムを開催するなど、一部で取組みが始められているものの、現在のところ「防災まちづくり」を活動の主目的またはそのひとつとする市民団体は少ない。また、自主防災組織（地縁型組織でリーダー層の年齢が比較的高い）と、ボランタリーなグループ（若者や勤労者が比較的多い）との交流連携はこれまであまり行なわれてこなかった。

こうした実態を踏まえて、仙台市消防局では想定される宮城県沖地震における市民の防災活動について話し合うため、多様な市民団体からなる「仙台市震災対策市民会議」を組織し、本年１月より２年間にわたる検討を開始した（会長：増田聡東北大学大学院教授、委員：自治会町内会、ＰＴＡ、老人クラブ、社会福祉協議会、商工会議所、ＮＰＯ（みやぎ災害救援ボランティアセンター、宮城レスキュー・サポート・バイク・ネットワーク）関係者）。

なお、女性を起爆剤に地域住民の防災まちづくり活動誘発をねらった「安全・安心まちづくり女性フォーラム（平成 9～11 年度）」プロジェクトに仙台は全国 23 の地域・団体の１つとして参加、ワークショップを実施した。これは老若男女の市民が積極的に参加したことで他の地域からも注目を集め、その後の発展が期待された。しかし、プロジェクト終了後の現在全国 23 のうち約３割の地域でこのプロジェクトを契機とした防災まちづくり活動が継続する中、仙台の場合はキーパーソンの異動などにより求心力を失い、早い段階で活動は停止した。ただし、当時の実行委員会メンバーやワークショップ参加者の防災まちづくり活動への関心は持続しており、6 月に実施したプレイベントを契機に、多くの人が現在のネットワークも活用し、開催ＰＲやメーリングリスト立ち上げ、参加者募集などに協力し、さらに当日発表を行なったグループもあった。

こうしたことから、「第１回全国防災まちづくりフォーラム」開催が仙台の防災まちづくり活発化の契機となる下地はあると考えられる。

４．開催の成果と今後の検討課題

（１）開催の成果

■地域に密着した取組みの掘り起こしと評価

当地域の防災まちづくりは自治防災組織が中心となっており、これらの中には名簿づくりや防災組織、防災訓練の見直しなど地域密着型ならではの手直しを行うことで参加者を増やし、発災時の対応力を強めているものがある。最優秀賞を受賞した「大岩２丁目自主防災会」はこれらの先行モデルともいえる。今回のフォーラムでは地元の５つの自主防災組織から発表があったが、防災まちづくり活動が災害時要援護者の名簿作成に効力を発揮することが伺えるなど、全国的にから見ても参考となるさまざまな活動内容が紹介された。

自由度が高くユニークな取組みを行なうボランタリーグループが注目を集めがちな中、「第１回全国防災まちづくりフォーラム」では、自主防災組織による地に足のついた活動が掘り起こされ、地域活動の担い手を励まし、学び合う良い機会となった。

■地域内及び地域間の交流の促進

今回の発表団体は主体・活動内容共に、多様性に富み、かつバランスの取れた構成で、終了後、地域内の参加者からは「市内も含めて、いろいろな団体の活動を知ることができてよかった」「これを契機に活動の活発化や連携が強まると思う」という声が数多く聞かれた。「全国防災まちづくりフォーラム」開催のねらいである防災まちづくりに関連した地域内及び地域間の交流支援については、その目的を一定程度達成できたといえる。

■防災まちづくり意識の高まりと新たな防災まちづくり活動の芽生え

防災フェアプログラム終了時には、防災まちづくりに関わる交流ネットワーク「みやぎ防災フォーラム（仮称）」立ち上げの提案がなされ、メーリングリストへの参加呼びかけが行なわれた。

当地では市民一般の防災対策や防災まちづくりへの関心はあまり高くないといわれているが、このフォーラムは市民の防災まちづくりへの意識を高め、個人やグループによる防災まちづくり活動活性化のよいきっかけとなった。

（２）今後に向けた課題

■地元自治体等との連携について

第１回全国防災まちづくりフォーラムは、防災フェア 2005 における開催の形をとったため、自治体の防災関係部局（消防局）が「全国防災まちづくりフォーラム」についても担当となった。同部局は限られた準備時間の中で的確に対応したが、発表等の内容面からすると、他に都市計画、建設、商工、福祉等、関係すると思われる部局は多い。今後はこれら関係部局ともできる限り連携をとり、早い段階でＮＰＯ団体等

の動向把握を始め、準備段階からの協力を求めていく必要があろう。

■一般市民を含む集客拡大

今回の聴衆は発表団体関係者が主で、一般市民の参加は残念ながら少なかった。各団体間の交流が主目的であったとはいえ、「防災」で一般の人々を集めることの難しさが改めて浮き彫りになった。また各方面へのパブリシティを行なったにも関わらず、マスコミの取材も多くはなかった。今後は一般市民が防災まちづくりを意識する気づきの機会ともなるよう、より積極的な集客拡大を図る必要がある。

防災まちづくりの担い手にターゲットを絞った対策としては、開催地・周辺地域の自治会・町内会を通した参加呼びかけを行なうことなどが考えられる。さらに、一般市民に対しては、「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」による「民間と市場の力を活かした防災戦略の基本的提言」で「防災が主目的でなくてもよい」との提言を行なっていることを踏まえて、一般市民が入りやすい“防災風味”を持った企画（例：ガーデニングをテーマにブロック塀対策へ関心を拡大させる催しなど。単なる人寄せイベントとは異なる）をもっと工夫する必要もある。

■準備･開催への市民参加

今回は準備期間の短さなどから、開催の企画・準備・運営について、防災まちづくりに関わる地元の市民グループや個人・企業などの協力を十分得ることはできなかった。市民自ら開催に関わることは、主体的な開催意識が芽生え、参加団体募集や一般市民の集客などについて、地域特性に根ざしたより積極的なアプローチを行ないやすくなる。また、企画自体も地域らしさがより強く発揮され、他地域の参加者や全国発信についてアピール性の高いものとなる可能性がある。今後は、地元行政・市民等による実行委員会方式の採用など、より参加性の高いものとすべきではないか。

■発表時間･発表サポート

今回のフォーラムでは１団体の発表時間が５分間であったことや、プレゼンテーション用機器のトラブルで、活動内容が十分伝わらないケースもあった。何らかの交流活動を積み上げた後のファイナルイベントではないため、活動紹介や相互交流の機会提供としては時間的に物足りないとの声も聞かれた。丸１日を発表会に当てるなどプログラム全体の時間配分やテーマ別分科会方式といった発表方法など、企画運営についてはさらに練り上げていく必要がある。

また、限られた発表時間で効果的な活動アピールが行なえるよう、発表団体紹介資料の配布、全ての発表団体への展示ブース提供、発表リハーサルや、ＯＡ機器が使えない高齢者等への映像資料活用のサポートなど、技術的な支援の工夫が必要である。

■審査講評会について

「表彰」については、参加者からは「さまざまな賞があってよかった」との声が聞かれ、また受賞団体からは後日、ここでの表彰が活動に対する地域での理解に大変効

果があったとの報告もあるなど、「表彰」方式はおおむね好評であった。

他方、発表者からは「（表彰団体以外を含む）それぞれの活動に対してもっと講評がほしかった」との声も聞かれた。「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」での議論においては「活動を褒めることが有効」と言われてきた。多様な活動に取り組む団体への評価は難しいが、「講評をもっと」という感想は、活動主体が何らかの形で活動を評価されたい（褒めてもらいたい）という気持ちの現われともみえる。今後に向けては、このフォーラム自体のステイタスを高めることはもとより、講評をよりていねいに行なうなど、参加者の一層の励みとなるよう、すすめ方の工夫もあってよいと考えられる。

■防災まちづくりポータルサイトとの連携強化

防災まちづくりポータルサイトから見れば、定期的な実施が予定されている「全国防災まちづくりフォーラム」はホットなコンテンツとしての価値があるだけでなく、ポータルサイトの防災まちづくり事例がフォーラムによって活動の担い手の顔が見えるものとなる。特に、フォーラムの模様をインターネットを活用して動画で全国に発信すれば、活動主体自らが活動内容を説明する理解しやすい形となる。他方、フォーラムは文字情報だけでは分りにくい活動の経緯等の情報を直接交換できる場としての意義も加わり、「全国防災まちづくりフォーラム」自体の価値も高まっていく。

こうしたことから、「防災まちづくりポータルサイト」と「全国防災まちづくりフォーラム」との連携を強化し、ＩＴ技術を活用した全国への情報発信を検討する必要がある。

≪参考≫「防災フェア 2005」の概要

■主催／「防災フェア 2005」実行委員会（内閣府、仙台市、防災週間推進協議会）

後援／警察庁、防衛庁、総務省、総務省消防庁、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、気象庁、海上保安庁、宮城県

特別協力／仙台ライフライン防災情報ネットワーク

協力団体／国土交通省東北地方整備局、東北技術事務所･仙台河川国道事務所、仙台管区気象台、国土地理院東北地方測量部、陸上自衛隊第 22 普通科連隊、日本赤十字社宮城県支部、宮城県土木部、宮城県警察、住宅金融公庫東北支店、（社）日本損害保険協会、東北大学総合学術博物館、ＮＴＴ東日本宮城支店、ＮＴＴドコモ東北、東北電力㈱仙台営業所、ＮＨＫ仙台放送局、ＦＭ仙台、(社)宮城県建築士会仙台支部、(社)ジャビック、仙台市水道局、仙台市ガス局、㈱バンテック、ミドリ安全宮城㈱、㈱エィアンドエイティー、㈱ウェザーニュース

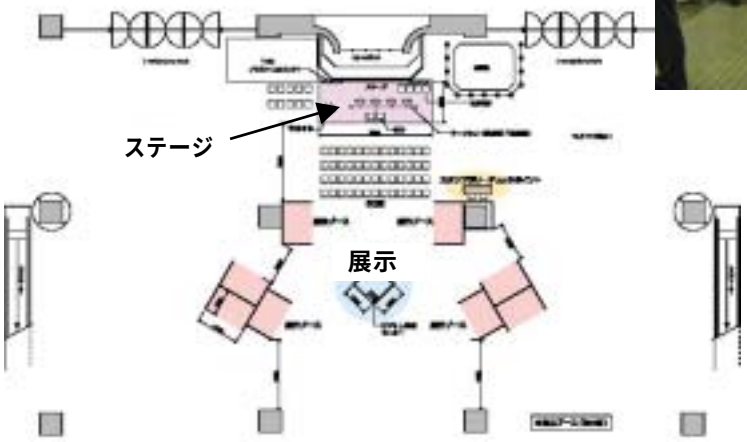
■開催日：平成 17 年９月２日（金）～９月５日（月）

■プログラム

ｉ．ＪＲ仙台駅2階コンコース会場

〔テーマ〕防災に関する情報のコミュニティ

2日（金）	14:00	･オープニングセレモニー	防災担当大臣、仙台市長、防災週間推進協議会会長によるテープカット
	14:00～17:00	･防災情報局	ステージにてミニ市民講座、クイズ大会等 情報通信関連企業等による展示
3日（土）～5日（月）	10:00～17:00		



ⅱ．仙台市勾当台公園会場

〔テーマ〕来場者が＜見て＞＜触れて＞＜感じて＞防災のいろいろを体験･体感

3日（土） ～ 4日（日）	10:00～17:00	･防災フェスティバルステージ ･防災ランド･防災体験･防災関連機器･車両展示	･防災クイズ、音楽隊の演奏、キャラクターショー、ミニ防災講座など ･豪雨体験車、地震体験車による災害体験、救急法等の体験 ･災害時の非常食炊き出し訓練実演配布 ･防災関係機関、企業の取組み･装備･災害対策車等の車両の展示

ⅲ．ＡＥＲ会場

〔テーマ〕防災について考え、語り合い交流する場

5階仙台市情報･産業プラザ　ネ！ットU多目的ホール			
3日（土）	14:30 ～17:00	･防災講演会	**「来るべき地震と災害時要援護者対応」** ①日本海溝型地震により想定される津波とその対策 ／東北大学大学院工学研究科教授　今村文彦氏 ②災害弱者対策：社会的意味と現状 ／東洋大学社会学部社会心理学科教授　田中淳氏 ③災害時要援護者の登録について ／安城市保健福祉部障害援護課長　成瀬行夫氏
4日（日）	10:00 ～17:00	第1回防災まちづくりフォーラム	
5日（月）	10:00 ～12:00	･防災講演会	**「住宅耐震補強の推進に向けて」** ①住宅の耐震補強を推進する上での課題と解決策 ／東京大学生産技術研究所教授　目黒公郎氏 ②耐震補強運動体験記 ／松崎建設株式会社　松崎孝平氏 ③住民による住宅耐震補強運動の取組み ／ひらつか防災まちづくりの会　篠原憲一氏
	13:00 ～16:00	･防災講演会	**「商店街と企業の防災」**（コメンテーター：板橋区役所福祉事務所長　鍵屋一氏） ①早稲田商店会における防災まちづくりの取組み ／早稲田商店会エコステーション事業部長　藤村望洋氏 ②災害時の事業継続（ＢＣＰ）と防災まちづくり ／京都大学経済研究所教授（前内閣府防災統括官付企画官）　丸谷浩明氏 ③ディスカッション

防災講演会

「稲むらの火」上映

5階仙台市情報･産業プラザ　ネ！ットU多目的ホール　関連展示ブース	
3～5日　10:00～17:00	○防災ポスター展（第 20 回防災ポスターコンクール入賞作品展示） ○ＤＶＤ「稲むらの火」上映 ○耐震診断、ブロック塀関係の展示、相談 ○防災関係機関･企業の展示 ○全国防災まちづくりフォーラム発表団体による展示

2階アトリウム	
2日（金）　14:00～17:00	防災関係機関等によるパネル展示
3～5日　10:00～17:00	

「防災フェア 2005」チラシ